遊郭輪廻
身体が火照り続けて快楽地獄
止まらない調教
成人向け
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

ゆうかくりんね

遊郭輪廻

まえがき

人外若旦那×男娼
モブ×男娼
複数モブ×男娼
遊郭ものです。

ハート喘ぎ/モブ攻めあり/複数プレイ/
乳首責め/玩具/快楽責め/
チクニー/焦らし/
受けフェラ・攻めフェラ/
結腸責め/淫語
イラマチオ/服装と下着だけ女装あり

18才未満の方はご遠慮ください。
成人向けです。
かぎのえみずる作

目次

記憶の遮断‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 007

お客様開拓‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 039

久遠の苛立ち‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 055

お客様と遊ぶ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 065

じゃれあい‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 075

たくさんのエッチ棒‥‥‥‥‥‥‥‥ 080

若旦那だーいすき‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 086

一般人向
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

1,　　記憶の遮断

目を醒ましたのは、紅い鳥かごの中だった。

鳥かごの中に、着物を開(はだ)けて自慰をしているのだと気付いた。

自慰をしながら思案しても頭はうまく回らない、気持ちよさだけが只管に疼く。

この気持ちよさを知ってしまったが最後、逃れる術も知恵も無く。快楽に流されるだけ。

少年は紅い鳥かごの中で、疼く身体を押さえるように肩を摩り。吐息をつけば、胸元にするりと手を伸ばす。ゆっくりと半円を画くように撫で回していれば、ぷっくらと膨れてくる。

膨れた乳輪は紅く。乳頭はつんとしていて、掠めるだけでもじんと響く。身体や、芯に悦が行き渡りそうになるのを堪える。

じわりじわりと蝕む熱は甘い蜜を舐めている感覚に近しく。もっともっとと、自分自身に媚びてしまいそうになる。

気持ちよさを求めて只管に突起を虐め倒せば、下腹部が盛り上がっていることに気付く。そうっと長襦袢を捲ればひくひくと雄が天上へ向かって、涎をだらだらとだらしなく流していた。

あと少しで達せるところだ、少年は思わず竿を握り裏筋をじわりと撫でた。

「あっ……やだ、これだめえ……♡　覚えたらだめなやつう……」

少年は首を振って甘い声を響かせると、くちゅくちゅと手を揺らし夢中になって、白濁を散らせた。

はあはあと呼気を荒げていれば、何人かに見られている感覚。

鳥かごにはカメラがついている。カメラの横に小型のマイクもセットになっていた。

「久遠、拗ねるのもいい加減にしないか。そろそろ客をとってくれ。お前、客の前で喘ぐの好きだったじゃないか」

スピーカー越しに聞こえる酔いそうな程に脳に響く甘い声。低めに制する声は、自分を久遠と喚んだ。久遠は何故ここにいるのか、なぜ花魁衣装を着ているのか、自慰に耽っていたのかも思い出せず。カメラに向かって声をかけた。

「ねえ、お兄さん、ココはどこ？　俺は久遠という名前なの？」

「久遠？　そうか、またそうなったか。ココは僕が攫った人間を囲って客をとらせる遊郭だ。お前は売られたんだよ」
「遊郭って……？」
「セックスをする店だ。まあ待て、説明しに向かう。お前を確かめたい」

　ぶつっと音声が途絶えれば久遠はまだ火照っている身体を持て余す。
　あの甘い響きの男が来るまでは、男の姿でも妄想して自慰を再開しようかと手を弄る。
　室内は黒い壁に覆われていて、確かにタンスやベッドも置いてある。ただし、鳥かごの中だが。
　真っ赤な着物に白濁がかかる、また胸の刺激で達してしまった。緩やかに癖になっていく刺激がたまらない。手が止まらないうちに目を閉じ、行為に耽っていれば手を掴まれて目を開く。
　目の前に臙脂色（えんじいろ）の髪と目の色をした、男が手を

掴み久遠を組み敷いた。背丈は百八十近くある。

　久遠は着物の中に埋もれ、身を捩る。

　男は凍てついた眼差しで久遠の胸板を撫でてから、舌なめずりをした。

「お前、また僕を困らせようって話じゃないよな」

「本当に判らないんだ、お兄さんは誰だ」

「妖しだよ。蜘蛛が人に化けたのが僕だ。八ヶ岳斬（やつがたけきり）という。なんだ本当に記憶喪失か」

「そうだよ、じゃあ俺は誰なんだ」

「お前は僕が手塩に掛けて育てた男娼の、久遠庇（くおんひさし）だ。この店では、くうって呼ばれていた」

　男は覆い被さったまま久遠を見下ろし、首根に顔を埋めた。

「まさかえっちの仕方も忘れているんじゃないだろうな」

「……うるさいな、絶対にしなきゃいけないわけじゃ

ないだろ」
「いいや、絶対にしないと困るな。何せお前には客がいっぱいだ。なのにお客様にお出しできなきゃ困る」
　斬はゆらりと身体のラインをなぞりながら、膝で股間を押し上げ、胸元を愛撫し始めた。
　乳頭をかりかり前歯で引っ掻き、乳輪を強めに吸う。唾液に塗れた舌が乳輪を覆えば、じゅうううと吸いながら引っ張っていく。
「あっ、あっ♡　だめえ、それやだ、きもちいい……」
「感度はそのままだな、仕方だけ忘れているのかね」
　斬はぐいぐい竿を刺激し、反応しつつある竿を指に輪っかを作って戒めた。戒めると途端に心地よかった刺激が苦しくなっていく。じわじわと脳天を突きそうな刺激が、理性的に判らせられていく。本能のみで味わうのを許されない。
久遠は首をいやいやとふり続け、涙目になりながら斬の背に手を回した。仄暗い瞳と出くわすと、胸が高鳴る。

ああ、この目が好きだ――久遠は瞬時に察した。

記憶を無くす前、この男がきっと好きだったのではないかと。

＊

胸元を刺激されながら腹を撫で摩られ、脇腹を撫でられる。首根や鎖骨に齧り付く姿は、何処か愛らしくも見えるのに、目が合えば完全に獣だ。

獣に犯されている服従している感覚が、背筋にぞくぞくと屹立を硬くした。

「きりい、もっと、もっとなめて……」

「そこだけじゃないだろう、欲しいのは。そんなことまで忘れたのか坊や」

斬は内腿を摩り、際どいところにまで触れていく。

久遠の股間ぎりぎりまでに撫でれば、久遠は仰け反る。

斬は身をずらし、着物に埋もれた下半身に顔を寄せて、後孔に舌を尖らせた。

じゅくじゅくと内壁の浅い箇所を、皺の一本一本丁寧に舐めていく斬。久遠は恥ずかしくなって羞恥に頭が混乱していく。

「きりい、そんなとこやだ、やめて、むねがいい」
「駄目だ、お前の言うことは聞いてやらないよ。僕が主人だ」

斬はローションをポケットから取り出すと、内壁に使われ。中が解れていく。

解れていく感覚に身をくねらせれば、斬は内腿に齧り付いた。痕が紅く映える。

ゆっくりと指は左右に押し広げられ、やがて三本

かき混ぜられる。しこりを刺激されれば、身に電流が走る。

「ああっ、ん、やああ！　はぁっ……♡」

「中の感度もしっかりとあるか。じゃあこっちの奉仕の仕方は覚えているか、久遠」

　斬に問われて乗ってやるのも不本意だったけれど、雄槍を見せつけられるように着物からぐいと出てくれば喉が鳴る。

　ああ、それが欲しくて堪らない。喉が渇く。ひりひりとした喉の餓えを満たせるのは、この肉棒だけじゃないかと、久遠は目を細めうっとりと身を起こせば肉棒に顔を寄せる。下腹部から指は引き抜かれ、身は自由だ。自由故に自分の意思で求めるのだ。

「覚悟しろよ……」

　悔しさを口に斬にのし掛かれば、ゆっくりと焦らすように斬の上で雄を擦りつけてやり。

　後孔に宛がうと、ゆっくりと身を沈めていく。

「あっ、……こんな、深い……」
「お前から腰振ってるんだよ、雌犬」
「言うなばあか、あっあっ、大きくしないで♡」

　久遠は仰け反りながら、あと少し腰を落としていけばどれほど気持ちいいのかと畏れる。

　あと少しが踏み出せない。
　今でさえ気持ちいいのだからいいではないかと、浅いところを好んで律動させるように腰を振っていく。

　斬の雄が中で擦れていくのが堪らない、けれど、けれど。あとすこし。あとすこし。

　じ、と斬を見つめても冷たい眼差しが返ってくる。裏腹に肉欲は膨らむ。また中で硬くなった。

「うっ……ぁ、あ、……きりの、ばか……」

「しっかり腰をおとしてみろ、お前の欲しい物を与えられる。お前が望めばすぐだ」
「んっ……ほし、い。……ちょー、だい♡」

　久遠は一気に身体から力を抜いて、深く雄を咥え込むと脳天に快楽が刻み込まれ、最奥に到達しただけで達してしまい。ぴゅくりと蜜を放った。
　蜜が斬にかかっても、斬は冷たい顔つきのままだ。
「あっ、あっ、もっと、もっとちょうだい、きもちいいよお、これがいいよお……！」

「普段からこれくらい素直なら可愛いのにな」

　斬は腰を下から衝き上げれば、久遠は声無くまた達した。

「待って、まって、いってるう、いってう、か、あ」

「これくらいで？　いつももっと男を手玉にとってるだろお前」

「だあめ、らめ、いま、だめ。まって、まってえ♡」

　久遠の制止に聞く耳を持たない斬。斬は腰をしっかり両手で固定すれば、下から中をかき混ぜ、衝き上げていく。ぱんっぱんっぱんっと重めのストロークで衝き上げられる感覚に久遠はちかちかとしていき、また白濁を射精し、斬にもたれかかるように意識を飛ばした。

「……もうへばったのか。となると、お得意さんは後回しだな」

斬は意識のない久遠の中に白濁をたっぷりと注ぎ込んだ。

米神にキスをすれば、その瞬間だけは柔らかな眼差しだったが、久遠には知る術もない。

2,

　斬の腕の中で、檜風呂の中。

　斬が処理をした身体は綺麗で不思議な疲労感とふわふわした心地だけが身体に残る。

「何が切っ掛けかわからないが、お前ほんとに記憶ないみたいだねえ」

「だから言っている、だろ。あんなになるまで……」

「気持ちいいのお前好きだからいいじゃあないか」

「そうだけどあんな形で知りたくなかった！　人間には何のために会話ってものがあるとおもう！？」

「知らんなあ、僕は蜘蛛だから」

「蜘蛛？」

「そう、好きになった人は食べちゃう蜘蛛なんだ」

　怖いだろう、とどや顔で斬が威張れば、手で水鉄

砲の形を作る久遠。飛沫を斬に浴びせまくると、斬は嫌がった。

「子供みたいな真似するなよ、随分精神年齢が退行したな」
「うるっせばーか、ばーか！　……記憶無くす前の俺ってどんなやつだったの」
「聞き分けの良いお人形だったよ。ビスクドールを弄っているみたいな感覚なのに、えろいから不思議だった。いまはいまで面白い……が、だめだな」
「なにがだめなんだ」
「お客様の前にお出しできない状態だ。とくにお得意様は。だから、ここ数日間みっちり教育を受け直ししてもらうぞ」
「……あんた以外ともヤるの？」
「そういうことになる」
　逃げてやろうかなと思案していれば、じっと冷たい目は眇めてきて呆れている。

「逃げようなんて思うなよ、この遊郭は蜘蛛の巣の輪郭をなぞるように、迷路じみた作りになっている。僕の案内なしでは出て行けやしない」

久遠を引き寄せ抱きしめて唸る声に偽りは含まれていないと感じる。

久遠は抱きしめられれば謎の鼓動に慌てて、斬から離れようとした。

広い浴槽なのだから密着する必要もないだろうに、斬はスキンシップが好きな様子だった。

「客を何人取れば逃がしてくれる？」

「駄目だ、ずっとだ。ず一っと、お前はそばにいるんだ。わかるね？　……記憶をなくしても。ずっとだよ」

「わかんねえよ、そもそもなんでここにいるのかも知らない」

「……いいじゃないか、ずっとここにいたまえよ。不自由はさせない。対価にお前は気持ちよくなるだけ」

「気持ちいいのはよかったけど、さあ。ここで何かい

やなことあったんじゃないの、俺ってやつは」
「それはそうかもしれないな。ここんとこサボり癖がついていた。仕込みもあるんだから、しっかり働いてもらうぞ」
　有無を言わさない言葉に久遠は湯船からざばっと出て行き、気恥ずかしさを隠していく。
　いったいなにがどうなっているか判らない。
　あんな男に仕込まれていくのを悦びに感じていくなんて。人間にうまく化けているとはいえ、人ではない気配もする。牙は若干見える。
　ときめく要素など何一つないはずだ。
　それでも、――あの男の大きな手はがっしりとしていてとても全てを預けたくなるほど好かった。

「こんなときに何を考えているんだ、俺は」
頬を撫で摩りながら風呂上がりの鏡台へ近づく。
銀色の髪に、紫の目。童顔は年齢をいくつか思い出させない効果を増させる。

頭のもやもやをかき消そうと久遠はバスタオルで頭をわしわしと拭いていく。

後ろから同じくあがった斬がバスタオルに手を重ねて、タオルドライをしていく。ゆっくりとバスタオルで雫を丁寧に拭き取るとドライヤーで髪の毛の手入れまでしてくれる上に、肌の手入れもわざわざしてくれる。

斬の目の怖さとは裏腹に、甲斐甲斐しい。

瞬いて驚いていると、斬は指先にマニュキアを塗っていく。選んだ色は斬の髪と目の色。

「飼われている事実は、お忘れ無きよう」
「丁寧な飼い主っぷりだな」
「飼い犬はかわいいものじゃないかね」
「あんたの価値観はわかったよ、俺は金を運ぶ犬ってことなんだな」
「さてね、あとの話は自分で思い出していけ。僕は何も言わない」

面倒くさくなったのか斬はマニキュアを足先にまで塗っていく。

足先に塗っている姿を見ていくのは変な気分になっていく。

じくり、と背筋に淡い悦が立つ。

まだ塗られていない片方の足の親指を、斬に向ける。

飼い犬の反乱めいた行動に動じるわけもなく、斬は親指を口腔に含むと唾液たっぷりに指フェラのような淫らな動きを見せた。

行為自体気持ちいいわけじゃないのに、腰が甘く痺れる。

「ふふ、あんたこうやって傅(かしずく)くほうが似合うじゃないか」

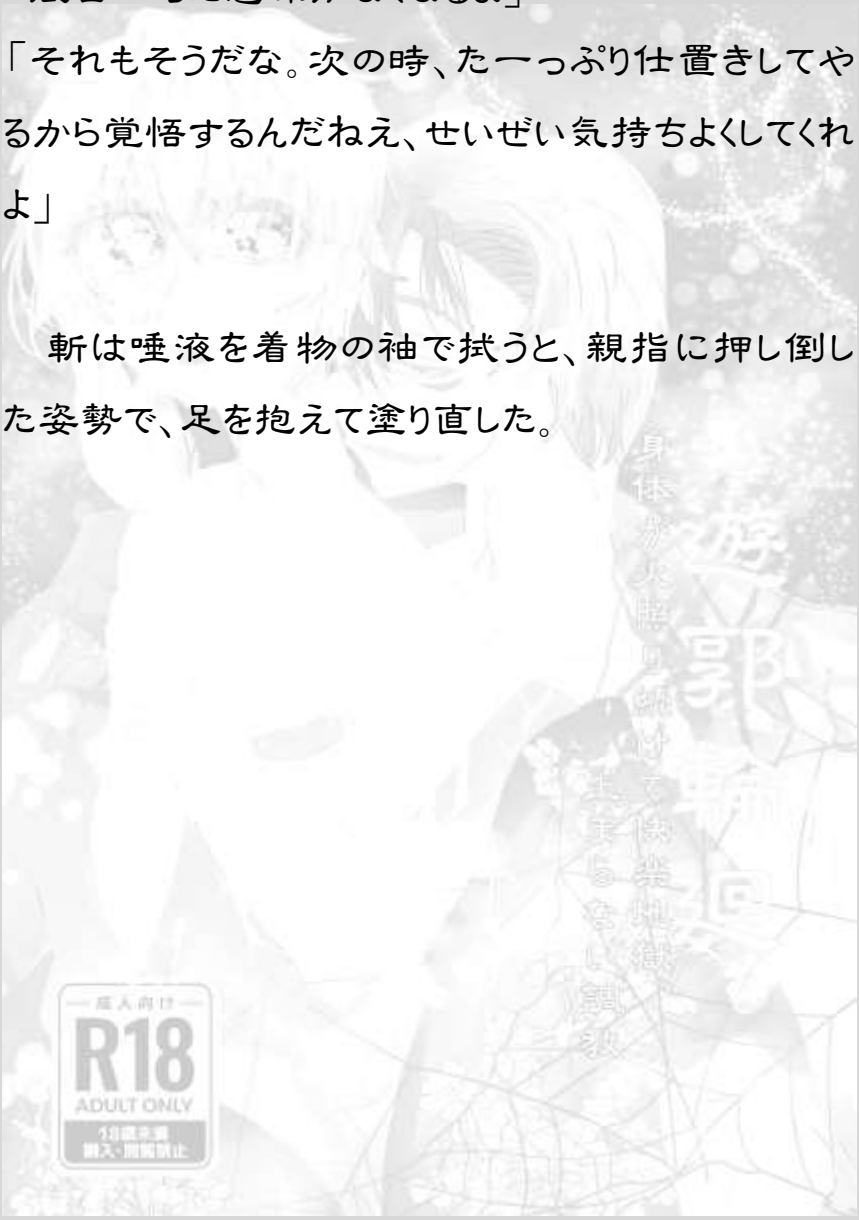
「僕のサービス精神を揶揄(やゆ)しないでくれたまえよ」

かり、と甘噛みしてから足から口を離した斬は、久遠を引き寄せ足に齧り付き、押し倒した。

「風呂入った意味がなくなるよ」

「それもそうだな。次の時、たーっぷり仕置きしてやるから覚悟するんだねえ、せいぜい気持ちよくしてくれよ」

　斬は唾液を着物の袖で拭うと、親指に押し倒した姿勢で、足を抱えて塗り直した。



遊郭輪廻

発行日　2023年05月13日
発行者　かぎのえみずる（さんかく定戯）
印刷所　うぇぶのみ
MAIL　mizurukaginoe@gmail.com

Twitter　@sankakubunbun
Pixiv ID　74487021

※無断転載、複製、ネットオークション等への出品はご遠慮ください
全てフィクションで、個人的に書いた作品です。